

ちりあ

様の國三人姉妹他

イブセン

人形の家野鴨他

72

世界文学全集

22

岡田書房



世界文学全集

22

チェーホフ

桜の園/三人姉妹/他

イブセン

人形の家/野鴨/他

神西 清・杉山 誠・山室 静 訳

河出書房

© 1969

カラー版 世界文学全集 第22巻

チェーホフ 三人姉妹 桜の園 かもめ 他

イブセン 人形の家 ヘッダ・ガブラー 野鴨

昭和 44 年 1 月 20 日 初版印刷

昭和 44 年 1 月 25 日 初版発行

訳者 神西清
杉山誠
山室静

装幀者 亀倉雄策

発行者 中島隆之

印刷者 澤村嘉一

印刷 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

定価 750 円

製本・加藤製本株式会社

製函・加藤製函印刷株式会社

本文用紙・三菱製紙株式会社

表紙・日本クロス工業株式会社

東京都千代田区神田小川町3の6

電話 東京 (292) 3711 (大代表)・振替口座 東京 10802

目 次

チ ャ ー ホ フ / イ プ セ ン

三人姉妹	5
桜の園	59
かもめ	103
ブーニャ伯父さん	145
短編集	187
ねむい	189
グーセフ	194
可愛い女	203
犬を連れた奥さん	214
人形の家	229
ヘッダ・ガブラー	289
野鴨	351
年表	427
解説	445

巻頭口絵 41歳のチャーホフ（右）と晩年のイブセン

本文カラーさし絵

金森 馨

チャールズ・ミコライチャック

コスティア・テレスコヴィッチ

© 1968 K・Kanamori

© 1967 C・Mikolaycak

© 1967 K・Terechkovitch

装 幀 亀倉雄策

チ
エ
ー
ホ
フ

神
西
清
訳

三人姊妹

登場人物

アンドレイ（セルゲーエヴィチ・プロソゾフ）（この訳文では彼の年齢の間に想定してある）

ナターシャ（ナターリヤ・イヴーノヴナ）そのいいなづけ、のちに妻、

オーリガ（愛称オーリヤ）

マーシヤ（正式にはマリヤ）（アンドレイの姉妹。）

イリーナ（俗にはアリーナ）

クルイギン（フョードル・イリーイチ）中学教師、マーシヤの夫。

ヴェルシーニン（アレクサンドル・イグナーチエヴィチ）陸軍中佐、

砲兵中隊長。

トゥーゼンバフ（ニコライ・リヴオーヴィチ）男爵、陸軍中尉。（この姓がドイツからの帰化人であることを示している。したがってトゥーゼンバッハとドイツ語にはしない）

ソリョーヌイ（ワシーリイ・ワシーリエヴィチ）陸軍二等大尉。

チェブトイキン（イワン・ロマーノヴィチ）軍医。

フェドーチク（アレクセイ・ペトロヴィチ）陸軍少尉。

ローデ（ヴラヂーミル・カールロヴィチ）陸軍少尉。（この姓はフランス系である）

フェラポント 県会の守衛、老人。

アンフィーサ 乳母、八十歳の老婆。

県庁のある町でのこと。

第一幕

ブローソロフの家。円柱のならんだ客間。柱の向こうに大広間が見える。ま昼。戸外は日ざかりで朗らかである。広間では朝食（わが国の午食にあたる）のテーブルをととのえている。

オリーガが、女学校女教師の青い制服をきて、立ちどまつたり歩いたりしながら、生徒のノートを直しつづけている。マーシャは黒い服をつけ、帽子を膝にのせてすわり、小型な本を読んでいる。イリーナは白い服をきて、立つて考えこんでいる。

オリーガ お父さまはちょうど一年まえ、それもこの五月五日の、あなたの「名の日」（天使の日ともいう。当人の洗礼名と同じ名の聖人）に亡くなったのね、イリーナ。あの日はひどい寒さで、雪がふつていた。わたしは、もうとても生きてられないような気がしたし、あなたは気が遠くなって、死んだみたいにならないうた。でも、こうして一年たってみると、わたしはちがうに、あの時のことが思いだせるし、あなたももう白い服をきて、晴ればれた顔をしているわ。（時計が十二を打つ）あの時も、やっぱり時計が鳴ったつけ。（間）覚えてるわ、お棺（くわん）が送られて行くあいだ、軍楽隊がマーチをやったし、墓地じゃ弔銃（ちうじゆう）を射ったわね。お父さまは將軍で、旅団長だったけれど、そのわりに会葬者は少なかった。もっとも、あの日は雨だったわ。ひ

どいみぞれだった。

イリーナ そんなこと思ひだして、どうするのよ！

列柱のむこう、広間のテーブルのあたりに、トゥーゼンバフ男爵、チェブトイキン、ソリコーヌイがあらわれる。

オリーガ 今日は暖かで、窓をあけっぱなしにしておいてもいいほどののに、白樺（しらば）はまだ芽を吹かない。お父さまが旅団長になって、わたしたちを連れてモスクワをお立ちになったのは、もう十一年前のことだけれど、今でもはつきり覚えていて——五月のはじめ、ちょうど今ごろのモスクワは、もう花がみんな咲いて、ほかほかして、日ざしがあふれているわ。十一年たった今日でも、わたしあすこのことは、まるで昨日たつて来たように覚えていての。まあ、どうでしょう！ けさ目がさめて、ぱつと一面に明るいのを見たら、春の来たのを見たら、とたんにうれしさがこみ上げてきて、生まれ故郷へ帰りたくてたまらなくなつたわ。

チェブトイキン ほかほかしい！

トゥーゼンバフ もちろん、くだらん話です。

マーシャ （本の上に考えこみながら、そつと歌を口笛で吹く）

オリーガ 口笛はやめて、マーシャ。どうしてそんなまねができるんだろう！ （間）なにしろわたし、毎日学校へ行つて、それから夕方までレッスンにまわるものだから、しょっちゅう頭痛はするし、考え方までが、すっかりばあさんじみてきたようだわ。そしてじつさい、学校に勤めだしてから四年のあいだに、毎日一滴また一滴と、力や若さが抜けてゆくような気がする。だんだん大きく強まってゆくのは、空想だけ……

イリーナ モスクワへ行くといひね。この家を売って、きっぱりこの土地と手を切つて、モスクワへ……

オーリガ そうよ！ 早くモスクワへねえ。

チエフトイキンとトゥーゼンバフ笑う。

イリーナ 兄さんは、きつと大学教授になるんだから、どうせここに
いるつもりはないわ。ただ困るのはマーシャのこと、かわいそう
に。

オーリガ マーシャは毎年、夏休みじゅうモスクワへ来たらしいわ。

マーシャ (そつと歌を口笛で吹く)

イリーナ 大丈夫みんな、うまくいってよ。(窓を見ながら) いいお天気
ねえ、今日は。どうしてこう気持ちが晴ればれしてるのか、あたし
自分でもわからない！ けさ、今日はあたしの「名の日」だった
と、ひよいと思いだしたら、急にうれしくなって、まだお母さまが
生きてらした、子供のころを思い出したの。すると、あとからあと
から、すばらしい考えがわいてきて、胸がどきどきしたわ。そりゃ
すばらしい考えばかり！

オーリガ 今日あんたは、いかにも晴れやかで、いつもよりずっとき
れいに見えるわ。マーシャもきれいわ。アンドレイだって、美男な
のだけど、ただああ肥^とってしま^とっちゃ形^ななしたわ。わたしきたら、
このとおり老けて、すっかり瘦^とせてしまった。きつとこれも、学校
で娘たちにかんしゃくばかり起こすからよ。今日はお休みで、こう
して家にいるので、頭痛もしないし、昨日より若くなったような気
がする。わたしは二十八だけれど、ただねえ……。いいえ、不足を
いうことはない、みんな神さまの御心^{ごころ}だもの。でもね、わたしこん
な気もするの——もしもお嫁にいつて、いちんちじゅう家にいられ
たら、そのほうがもっといいようなね。(聞)わたし、夫を大事にす
るわ、きつと。

トゥーゼンバフ (ソリョーヌイに) そんなばかなことばかり言って、きみ

の話はもうたくさんですよ。(客間にはいりながら) そうそう、忘れて
いました。今日こちらへ、われわれの隊の新しい指揮官、ヴェルシ
ーニンがごあいさつに出るはずですよ。(ピアノのそばにすわる)

オーリガ まあ、そう！ たいそううれしいですわ。

イリーナ そのかた、お年より？

トゥーゼンバフ いや、大したことはありません。まあせいぜい四十
か、四十五でしょう。(そつと強く) 見たところ、りっぱな人物です。
すくなくも愚物じゃない——これは確かです。ただ、少々話ずきで
すがね。

イリーナ きれいなかった？

トゥーゼンバフ ええ、なかなかね。ただその、奥さんと、そのおっ母
さんと、娘がふたりいますがね。おまけに二度目の細君なんです。
あのひとはあいさつに行く先方で、かならず、細君に娘がふたりい
ると話すんですよ。こちらでもきつと言うでしょうよ。その奥さん
というのは、なんだか少々低能みたいなひとでしてね、いまだに娘
のように髪をおさげにして、へんに哲学じみた大きなことばかり並
べて、しかもちょいちょい自殺を企てるんです。まあご主人につら
あて、というところでしょうがね。ぼくならあんな女、とつくにご
めんこうむってところですが、あのひとはじつと我慢して、ただ
愚痴をこぼすだけなんです。

ソリョーヌイ (チエフトイキンとともに、広間から客間へはいつて来ながら)
片手だとはくは一ブード半(約二五)ぐらいしか持ちあげられないが、
両手だと五ブード(約八二)、いや六ブード(約九〇)だって持ちあげら
れる。だからぼくは、こう結論するんです——ふたりがかりの力
は、ひとりの二倍じゃなくって、三倍も、いやもつと上だとね……
チエフトイキン (歩きながら新聞を読む) 抜け毛には……ええと、ナフタ
リンハグラムをアルコール半瓶に……溶解し、これを毎日もちいる
……(手帳に書きこむ) 書きとめておこう！ (ソリョーヌイに) それで

さ、いいかねきみ、瓶の口にコルクをはめて、それにガラス管をと
おす。……それから、そのへんにあるごくありふれた明礬みょうばんを、ひと
つまみとってね……

イリーナ チェブトイキンさん。ねえ、チェブトイキンさんてば！

チェブトイキン なんです、お嬢さん、わたしのかわいい？

イリーナ 教えてちょうだい、なんだってあたし、今日はこんなふう
れしいんでしょう？ まるで帆をいっぱい張って、海を走ってい
るみたい——上にはひろびろした青空、大きなまっ白な鳥が飛んで
いてね。なぜこうなんでしょう？ ねえ、なぜ？

チェブトイキン（彼女の両手にキスしながら、やさしく）わたしの白鳥さ
ん……

イリーナ きょう目がさめて、起きて顔を洗ったら、急にあたし、こ
の世の中のことがみんなはつきりしてきて、いかに生くべきかとい
うことが、わかったような気がしたの。ねえ、チェブトイキンさ
ん、あたしすっかり知ってるわ。人間は努力しなければならぬ、
だれだって額に汗して働かなければね。そこにこそ、人生の意義も
目的も、その幸福も、そのよろこびや感激も、のこらずあるのよ。
夜の明けるか明けないうちに起きだして、街で石をトンカチやる労
働者や、羊飼いや、子供たちを教える先生や、鉄道の機関手になっ
たら、さぞいいでしょうね。……ほんとに、人間であるとかないど
かの問題じゃないわ、ただ働けさえすれば、いっそ牛にでも、ただ
の馬にでも、なったほうがましよ——お昼の十二時にこのこ起き
だして、ベッドのなかでコーヒーを飲んで、それからお召し替えに
二時間もかかる……ああ、おそろしい、そんな若い女になるよ
りはね！ 暑い日に、水を飲みたくなることがあるでしょう。あた
しが働きたくなったのも、それと同じよ。これからもしあたしが、
朝早く起きてがんばらないようだったら、絶交してちょうだいね、
チェブトイキンさん。

チェブトイキン（やさしく）しますよ、絶交しますよ……

オーリガ 父はわたしたちを、七時に起きるように、しつけてくれま
したの。今でもイリーナは、七時に目だけはさますけど、それから
少なくとも九時までは、床のなかで何か考えているのよ。そのまじめ
な顔といったら！（笑う）

イリーナ 姉さんは、いつまでもあたしを子供と想ってるものだから、
あたしがまじめな顔をするとか変な気がするのよ。あたしだって、二
十歳よ！

トゥーゼンバフ 勤勞をなつかしむ気持ち、いやほんとに、ぼくはよく
わかりますよ！ ぼくは生まれてこのかた、一度だって働いたこと
がない。あの寒い、ぐうたらなベテルブルグで、勤勞とか心配とか
いうものはないぞ知らない家庭に、ぼくと生まれたぼくですから
ね。忘れもしませんが、幼年学校から家へ帰ってくると、下男が長
靴をぬがせてくれる、ぼくはただのこねほうだいでしたが、そのぼ
くを母親は後生大事に奉って、ほかの人がぼくにちがった扱いをす
ると、びっくり仰天する始末でした。ぼくが手足を動かさずにすむ
ように、みんななかばってくれたんです。もっとも、そのかばいだ
てが成功したかどうか、そこはどうやらあやしいんですがね！
いまや時代は移って、われわれみなの上に、どえらいうねりが迫り
つつあります。たくましい、はげしい嵐がもりあがって、もうすぐ
そこまで来ている。まもなくそれは、われわれの社会から、怠慢や、
無関心や、勤勞への色めがねや、くされきった倦怠けんたいだのを、一掃し
てくれるでしょう。ぼくは働きますよ。あと二十五年か三十年もし
たら、人間はみんな働くようになりますよ。ひとりのこらずね！

チェブトイキン わたしはごめんだな。

トゥーゼンバフ あなたなんか、勘定にはいりません。

ソリョーヌイ 二十五年たったら、きみはもうこの世にはいないさ、あ
りがたいことにね。まあ二、三年もすれば、きみは卒中でぼっくり

行ってしまうか、でなきゃこのぼくがかんしゃくをおこして、きみの額へ弾丸をぶちこむのがおちさ、なあきみ。(ポケットから香水瓶を出して、胸や手にふりかける)

チエフトイキン (笑う) いや、ほんとにわたしは、ついぞなんにもしたことがないな。大学を出たっきり、指一本うごかしたことがない。

小さな本一冊、読みとおしたことはなく、読むのはもっぱら新聞だけだね……(ポケットから別の新聞をとり出す) そらね。……まあたとえば、ドブロリユーボフ(ロシア十九世紀中葉の尖鋭な批評家)という男のいたことは、新聞で知っちゃいるが、じゃ何を書いたかというだんになると——知らないね。……どうぞご勝手に、というところさ。……(階下から床をコッコツイわせる音が聞こえる) そらね。……下でわたしを呼んでいる、だれか来たんだろう。すぐ来ます。……ちょっとお待ちを……(ひげをしきながら、あたふたと退場)

イリーナ あれ、何か思わくがあるのよ。

トゥーゼンバフ そう。まじめくさった顔をして出て行ったところを見ると、今あなたにプレゼントを持ってきましたよ。

イリーナ まあ、いやだわ!

オーリガ まったく、やりきれないわ。あのひと、ばかなことばかりするんだもの。

マーシャ 入江のほとり、みどりなす煙の木ありて、こがねの鎖(くさり)、その幹にかかりて……。こがねの鎖、その幹にかかりて……。(フシギの叙事詩「ルスタンとリュドミラ」より。)

この叙事詩にもとづいて、グリーンカのオペラがある。(立ちあがって、小声でうたう) オーリガ あなた今日、浮かな顔をしてるのね、マーシャ。

マーシャ (歌いながら帽子をかぶる)

オーリガ どこへ行くの?

マーシャ 帰るの。

イリーナ 変ねえ……

トゥーゼンバフ 『名の日』のお祝いを逃げだすなんて!

マーシャ いいのよ。……夕かた出直します。ごきげんよう、かわ

いいイリーナ……(イリーナにキスする) もう一ぺん——どうぞ元気で、仕合わせでね。むかし、お父さまがいらしたころは、『名の日』といえぱかならず、将校連中が三十人、四十人とやって来て、にぎやかだったものだわ。それが今日は、せいぜいひとり半ぐらいで、静かなことといったら、まるで砂漠みたい。……わたし行くわ。

……今日わたし、メランコロジ(ゆううつ症(メランホリーヤ)を、わざと語めかした言葉で言っている。彼女自身の覚え違いというより、むしろ夫クルイギンの術士癖への当てつけと解すべきであろう)で、くさくさするの。わたしの言うことなんか、気にしないでね。(泣き笑いしながら) あとで話しましょうね。じゃ、ちょっと失礼するわ、ね、イリーナ。わたし、どこかへ行って来るわ。

イリーナ (不満そうに) まあ、なんていうひと、姉さんは……

オーリガ (涙ぐんで) あなたの気持ち、わかるわ、マーシャ。

ソリョヌイ 男が哲学を並べると、それがすなわちフィロソフィステイクス(これまた、でたらめな外来語である)——つまりその、こじつけになるわけだが、

女がひとり、または、ふたりで哲学を並べだしたら、こりやもうてつきり——あたしの指を引っぱってね、ということなのさ。

マーシャ それ、どういうことなの? おつそろしい野蛮人ね、あなたは!

ソリョヌイ なんでもないです。『あなやと言うまもなく、熊は襲いかかりたり』さ。(間)

マーシャ (オーリガに、腹だたしげに) 泣かないで!

アンフィーサと、パイをささげたフェラポントが登場。

アンフィーサ こっちだよ、おまえさん。ずっとおはいり、おまえさんの足はきれいだからね。(イリーナに) 市会の、プロトボーボフさまから……お祝いのお菓子でございますよ。

イリーナ ありがとう。お礼を申しあげてね。(バイを受けとる)

フェラポント へえ、なんですかね?

イリーナ (声を高めて) お礼を申しあげて!

オリーガ ばあや、このひとにビローク(肉ナツツ)をあげて。フェラ

ポント、向こうへ行つて、ビロークを食べておくれ。

フェラポント へえ、なんですかね?

アンフィーサ さ、行こうよ、フェラポント。じいやさん、行こうよ。

……(フェラポントとともに退場)

マリーシャ イワンの息子だか、葉や罐かんの息子だか知らないけれど(わざと父を覚えてゐる、あのプロトボーボフなんか、わたしきらいよ。あんなひと、招ぶことないわ。)

イリーナ あたし、招びはしないのに。

マリーシャ そんならけっこう。

チェプティキン登場。そのあとから、銀のサモワールをささげた兵士。おどろきと不満のどよめき。

オリーガ (両手で顔をおおう) まあ、サモワール! 困ってしまうわ!

(広間のテーブルの方へ去る)

イリーナ ほんとにチェプティキンさん、なんてことなさるの!

トウゼンバフ (笑) ほらね、ぼくの言つたとおりだ。

マリーシャ チェプティキンさん、臆面おくめんのないかたねえ、あなたは!

チェプティキン かわいい、りっぱなお嬢さんがた。あなたがたは、わたしのただひとつの生きがいだ、この世で一ばん大事な人たちだ。

わたしはまもなく六十になる。老いばれで、ひとりぼっちで、吹けば飛ぶような老人です。……何か取柄とぐろがあるとしたら、あなたがたをいとしと思う、この心だけです。あなたがたがいなかったら、もうとっくにこの世におさらばしていただしようよ。……(イ

リーナに) わたしのかわいい嬢ちゃん、わたしはあなたが、オギヤアと生まれた日から知ってますよ……両手でだっこしたものですよ……わたしは、亡くなったママが大好きでしたよ……

イリーナ でも、どうしてそんな高いプレゼントを!

チェプティキン (涙ぐんで、腹だたく) 高いプレゼントですと。……ほんとに、あなたがたという人は! (従卒に) サモワールをあっちい

持っていけ。……(口まねする) 高いプレゼント……(従卒がサモワールを広間へ運び去る)

アンフィーサ (客間を通り抜けながら) 嬢さんがた、知らない軍人さんが見えましたよ! もう外套ぬいで、な、嬢さんがた、こっちおい

ですよ。アリーナ(イリーナの俗な呼び方)さんや、愛想よく、ていねいになさ

いまして。……(出て行きながら) もうとうに朝食の時刻なのにさ。

……やれやれ……

トウゼンバフ ヴェルシーニンですよ、きつと。

トウゼンバフ ヴェルシーニンですよ、きつと。

ヴェルシーニン登場。

トウゼンバフ ヴェルシーニン中佐!

ヴェルシーニン (マリーシャとイリーナに) お目にかかれて仕合わせです、

——ヴェルシーニンです。ようやくこちらへうかがえて、じつにじつにうれしく思います。大きくなりましたねえ! まったくどう

も!

イリーナ どうぞお掛けになって。あたくしたちも、うれしくぞんじますわ。

ヴェルシーニン (陽気に) いや、じつにうれしい、じつにうれしい!

だが、あなたがたは、三人姉妹きょうだいでいらしたはずですな。たしか——お嬢さん三人だったと記憶します。お顔はもう覚えていませんが、お父さまのプロゾロフ大佐には、ちっちゃな女のお子さんが三人

いらしたのを、はっきり記憶していますし、現にこの目で、しかと見ております。時のたつのは早いものだ！ いや、じつに、早いもんですなあ！

トウゼンバフ ヴェルシーニン中佐は、モスクワから赴任されたのです。

イリーナ モスクワから？ あなた、モスクワからいらしたんですの？
ヴェルシーニン ええ、モスクワから。亡くなられたお父さまが、あちらで砲兵中隊長をしておられたころ、わたしは同じ旅団の将校でした。（マーシャに）そう言えば、あなたのお顔は少し覚えがあるようです。

マーシャ でもわたしのほうでは——さっぱり！

イリーナ オーリヤ！ オーリヤ！（広間へ向かつて叫ぶ）オーリヤ、いらっしゃいよ！

オーリガ、広間から客間へはいり来る。

イリーナ ヴェルシーニン中佐、モスクワからおいでになったんですね。

ヴェルシーニン ではあなたが、一ばん上のオーリガさんですね。……すると、あなたがマリヤさん。……あなたがイリーナさん——一

ばん末の……

オーリガ モスクワからいらっしゃいましたの？

ヴェルシーニン そうです。モスクワの学校を出て、モスクワで任官して、長らくあちらで勤務していましたが、とうとうご当地の隊を持つことになって——ごらんのとおり転任して来しました。わたしはあなたがたを、ほんとに記憶しているわけではなく、ただご姉妹三人とだけ覚えています。お父さまのことは記憶がはっきりしていて、こうして目をつぶると、さながら生ける者のようにまぶたに浮かび

ますよ。モスクワのお宅へは、ちょいちょいうかがったものでした。……

オーリガ わたし、みなさん残らず覚えていような気でしたのに、思いがけなく……

ヴェルシーニン アレクサンドル・ヴェルシーニンと申します……

イリーナ ええ、ヴェルシーニンさん、あなたがモスクワからいらっしゃるなんて。……ほんとに夢のようだわ！

オーリガ ちょうどわたしたち、あちらへ住居を移そうと思つてるところへね。

イリーナ 秋までには移つてしまふつもりですの。故郷の町、あたしたち、あそこで生まれたんですもの。……元バスマンナヤ街……（オーリガと声をあわせてうれしそうに笑う）

マーシャ 思いがけなく、同郷のかたにお目にかかれたわけね。（生き生きと）ああ、やつと思ひだした！ 覚えてて、オーリヤ、うちのみんなが、『恋の少佐』って言っていたじゃない？ あなたはあのころ中尉で、だれかに恋してらした。どういうわけだか、みんなであなを、少佐少佐ってからかっていましたっけ……

ヴェルシーニン（笑う）そう、そう。……恋の少佐、それですよ。

マーシャ あの頃あなたは、口ひげだけでしたわ。……まあ、なんてお老けになって！（うるみ声で）なんてお老けになったの！

ヴェルシーニン さよう、恋の少佐と呼ばれていたころは、わたしもまだ若くって、恋をしていました。今となっちゃ、いやもう。

オーリガ でも、まだ一本も白髪が見えませぬわ。お老けになったにしても、まだお年よりじゃないわ。

ヴェルシーニン でももう、とつて四十三ですよ。あなたがたは、モスクワを離れてよほどになりますか？

イリーナ 十一年になりますの。あら、どうしたのマーシャ、泣いたりして、おかしいひと。……（声をうるませて）あたしまで泣きたく

なるわ……

マーシャ なんでもないの。あなたは、どの街にお住まいでしたの？

ヴェルシーニン 元バスマンナヤ街です。

オーリガ わたしたちも、もうここした……

ヴェルシーニン ひところはドイツ街にもおりました。ドイツ街から、

赤兵營(モスクワ東端にある兵營の名)へ通ったものです。その途中に、陰気な橋が

ありましてね、橋の下で水がざざざあいつています。孤独な身にと

っては、へんにわびしくなる景色でしたよ。(間)それにひきかえ、

ここの河はなんとというひろびろした、豊かな河でしょう！ じつ

に、すばらしい河だ！

オーリガ ええ、でもただ寒くてね。ここは寒くて、おまけに蚊かがい

ますの……

ヴェルシーニン 何をおっしゃる！ ここはじつに健康な、申しぶんの

ない、スラヴ的な氣候じゃありませんか。森がある、河がある……

おまけに、白樺びろもありますしね。なつかしい、つつましかかな白

樺、——わたしは木のなかで、あれが一ばん好きです。住むにはい

い土地ですね。ただ変なのは、鉄道の駅が二十キロも離れているこ

とですね。……どうしてそうなるのか、だれも知らんのです。

ソリョーヌイ そのわけなら、ぼくが知ってますよ。(二同彼を眺める)

なぜならばですな、もし駅が近ければ遠くはないはずだし、駅が遠

ければ、つまり近くないというわけですよ。

白けた沈黙。

トゥーゼンバフ ふざけた男だなあ、ええ、ソリョーヌイ君。

オーリガ わたしも今やつと、あなたを思いだしました。覚えてます

わ。

三人姉妹

ヴェルシーニン わたしは、お母さまをさぞんじあげていました。

チエフトイキン りっぱな婦人でした、天国にやすらいたまえ。

イリーナ ママは、モスクワに埋葬まいりょうしましたの。

オーリガ 新尼僧院（モスクワ西南端にある由緒の古い修道院。のちにチエフトイキンもここに葬られた）の墓地に……

マーシャ どうしたことでしょう、わたしもさう、お母さんの顔を

忘れかけているわ。わたしたちのことだって、そういつまで人は覚

えちゃいないでしょうよ。忘れてしまおうわ。

ヴェルシーニン そう、忘れるでしょう。それがわれわれの運命である

以上、どうにも仕方ありません。今われわれにとつて、深刻で意

味ぶかい、きわめて重大なことに思われるもの、——その

時がくれば、忘れられてしまふか、ささいなことに思われてくるで

しょう。(間)そこで面白いのは、そもそも将来、何が高尚で重大な

ものと考えられ、何がちっぽけな笑うべきものと見なされるだろう

か——そのところが現在われわれには全く見当がつかないという

点です。あのコペルニクスの発見、またたとえばコロンブスのそれ

は、はたして初めのうちは無用な笑うべきものと見えなかったでし

ようか？ 一方どこかの変わり者の書いた愚にもつかないたわ言

が、かえつて真理と思われはしなかったでしょうか？ そして現に

われわれが、こうしてばつを合わせている今の生活にたつて、時

がたつにつれて、どうも変だ、不便だ、知恵がない、なんだか不潔

だ——いやそれどころか、罪ぶかいとさえ、見えてくるかもしれま

せん……

トゥーゼンバフ さあ、どうですかねえ。ひょっとすると現在のわれわ

れの生活を、高尚だと呼んで、敬意をもって思いだしてくれるかも

しれませんよ。今日では拷問も死刑もなく、侵略もないけれど、そ

の一方、どれほどの悩みがあることでしょう！

ソリョーヌイ (かん高い声で) ちつ、ちつ、ちつ。……男爵閣下は、哲

学が三度の飯より好きだつてね。

トゥーゼンバフ ソリョーヌイ君、お願いだから、ぼくにかまわんでく

れたまえ……（席を移す）いいかげん、うんざりですよ。

ソリョーヌイ（かん高く）ちつ、ちつ、ちつ……

トウゼンバフ（ヴェルシーニンに）今日われわれが見聞きする悩みは、——多いことはじつに多いですが！——それなりにとにかく、すでに社会が、ある程度の道德的向上を達成したことを物語っています……

ヴェルシーニン そう、そう、もちろん。

チエプティキン ねえ男爵、いましがたあんたは、われわれの生活を高尚だと呼んでくれるだろうと言われたが、なあに人間は、いつになつたつて低いですよ……（立ちあがる）見なさい、このわたしの低いことを。だから、自分の生活は高尚だなどと、気休めを言わなければならんのさ、わかりきったことさね。

舞台うらで、ヴァイオリンの音。

マーシャ あれ、兄のアンドレイが弾いていますの。

イリーナ 兄は、うちでは学者で通っていますの。きつと教授になりますわ。ババは軍人でしたけれど、息子のほうは学問で身を立てようと決めましたの。

マーシャ ババの希望でね。

オーリガ わたしたち今日、さんざん弟をからかってやりましたの。

どうやら、少々れんあい気味なんですよ。

イリーナ このあるお嬢さんにね。そのひと、今日うちへ来ますわよ、きつとですわ。

マーシャ いやねえ、あのひとの衣装の好みといったら！ みつともないとか、流行おくれだとかいう段じゃなくて、ただもう気の毒だわ。なにやら奇抜な、けばけばしい、黄いろっぽいスカートに、こんなふうの下卑た房飾りがついて、それに赤いジャケットなんか着

こんでさ。おまけにほったときたら、てらてらに磨きたててねえ！ アンドレイが恋してなんかいるのですか——それじゃ、あんまりだわ。アンドレイだって、趣味があるもの。ただああして、わたしをからかっているのよ、かついでるのよ。きのうわたしが聞いた話では、あのひとは、この市会議長のプロトポーフのところへ嫁くんですって。それがいいわ……（機手のドアに向けて）アンドレイ、こつちへいらつしやい！ ねえ、ちよつと！

アンドレイ登場。

オーリガ これが弟のアンドレイですよ。

ヴェルシーニン ヴェルシーニンです。

アンドレイ プロソソフです。（顔の汗をふく）こちらの砲兵隊長に赴任されたのですか？

オーリガ それがどうでしょう、ヴェルシーニンさんはモスクワからいらしたのよ。

アンドレイ そう？ それはおめでどう、——これからはさぞ、うちの姉さんや妹たちが、あなたを悩ますことでしょう。

ヴェルシーニン それどころか、わたしのほうがもう、お三方に愛想をつかされましたよ。

イリーナ ほら、いかが、この額ぶち？ 肖像を入れるようになって、

アンドレイが今日お祝いにくれましたの！（額ぶちを見せる）これ、兄のお手製ですよ。

ヴェルシーニン（額ぶちを、と見こう見しながら、あいさつに窮して）なるほど……これはどうも……

イリーナ それから、ピアノの上にあるあの額ぶちも、やっぱり兄が作りましたの。